

房総半島総合開発地域

土地分類基本調査

館 山

5万分の1

国 土 調 査

千 葉 県

1970

序 文

千葉県は、近年開発の進展が著しく、従来の農漁業を中心とした県から工業開発、あるいは首都圏近郊整備地帯への人口の集積により都市化が急速に進んでいる。

ことに将来は、新東京国際空港の建設、東京湾横断道路、横断橋の架設さらには千葉港の整備等により、空、陸、海の要所となり、首都圏の千葉県にとどまらず、日本の千葉県、世界の千葉県として大きく変ぼうすることが期待されている。

経済企画庁では、急速に進む国土開発に対し地域の特性に応じた開発方式、保全および防災対策ならびにスプロール防止等各種開発計画の立案ならびに土地利用計画樹立の基礎資料とするため、本年度から10か年計画によって新全国総合開発計画に基づく大規模プロジェクト単位に国土調査法により、開発地域土地分類基本調査を都道府県に対する補助事業として実施することとなった。

そこで、千葉県としては、限りない発展の可能性を秘めた房総半島を総合的、科学的な開発を図る基礎資料とするため本調査を実施するものである。今回は、房総半島の南端にある「館山」図幅を調査したが、遂次北上し整備を期していく考えである。

また、本調査は、土地の基本的性格を調査したものであるので、行政的利用とともに開発関係者はもちろん広く各方面に利用されることを望むものである。

おわりに、資料の収集調査、図簿の作成等にご協力いただいた各位に深く感謝の意を表する次第である。

昭和46年3月

千葉県企画部長

大 橋 和 夫

目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区画	1
II 人 口	1
III 地 域 の 特 性	3
IV 主要産業の概要	7
V 開 発 の 現 状	8

各 論

I 地 形 分 類 図	11
II 表 層 地 質 図	19
III 土 壌 図	26
IV 水 系 谷 密 度 図	33
V 起 伏 量 図	36
VI 傾 斜 区 分 図	38
VII 開 発 規 制 図	40
VIII 土 地 利 用 現 況 図	45

ま え が き

1. 本調査は、千葉県が事業主体であり、千葉大学の協力を得て行なったものである。
2. 本調査は、自然的条件のうち、土地の基本的性格を形成している地形、表層地質、土壌の3要素を基礎とし、これに傾斜区分、水系・谷密度、起伏量、開発規制、土地利用現況を加味し、その結果を相互に有機的に組合せることによって、科学的な土地利用の可能性を分類するものである。
3. 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査簿である。
4. 調査の実施、成果の作成機関及び関係担当者は、下記のとおりである。

	総 括 千葉県企画部企画課	課 長	吉 田 巖	
		主 幹	齊 藤 芳 治	
		課長補佐	木 内 七 三 郎	
企 画 調 整 編	〃	係 長	伊 藤 和 二	
		主 事	熊 本 倅 晴	
		〃	宮 崎 勝 美	
		〃	竹 内 正 夫	
		〃	藍 久 光	
調 整 連 絡	農林部農産課	係 長	大 井 栄 三	
		副 主 査	諸 岡 孝 歌	
	農林部林務課	主 査	深 山 吉 衛	
	安房支庁総務課	係 長	込 山 哲 夫	
		主任主事	川 上 正 春	
地 形 調 査	千葉大学理学部	文部教官	川 崎 逸 郎	
			村 田 正 敏	
			長 島 芳 雄	
表 層 地 質 調 査	千葉大学教養部	文部教官	近 藤 精 造	
		〃	高 井 憲 二	

上じょう調査 千葉県農業試験場

室長 三好 洋

技師 石井 英之

◇ 鈴木 武

千葉県林業試験場

室長 榎本 善夫

技師 青沼 和夫

開発関連調査 千葉大学理学部

文部教官 川崎 逸郎

傾斜区分
水系、谷密度
起伏量
開発規制
土地利用現況

千葉県企画部企画課

村田 正敏

長島 芳雄

伊藤 和二

竹内 正夫

協力機関 千葉県総務部地方課

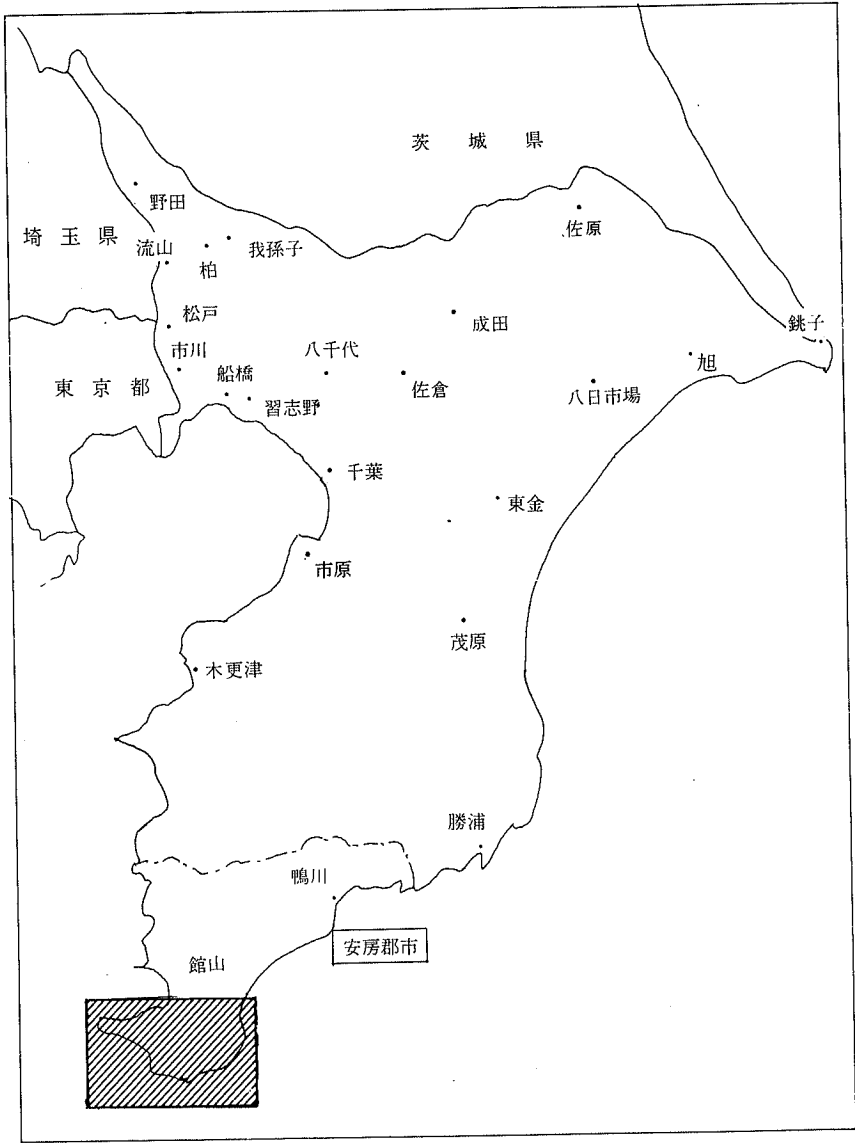
◇ 農林部関係各課

◇ 土木部関係各課

◇ 教育庁文化課

図幅内関係市町

位 置 図



総論

I 位置および行政区画

「館山」図幅は、房総半島の南端に位置し、南房総の中心である安房地域の南部にあたる。経緯度的位置は、東経 $139^{\circ}45' \sim 140^{\circ}00'$ 、北緯 $34^{\circ}50' \sim 35^{\circ}00'$ の範囲である。

また、本図幅内の行政区画は白浜町の全域および館山市、千倉町の大部分と、丸山町の一部からなっている。

なお、本地域の白浜町、千倉町、丸山町は、安房郡の一部を構成している。

第 1 図 行政区画



II 人口

本県の人口は、首都圏50キロ圏の近郊整備地帯において急激に増加しており、その他の地域は、逆に減少の傾向にある。

「館山」図幅を含む安房郡市は、その減少地域に属し、昭和40年から45年の5年間で約6,000人の減少をみている。しかし、世帯数は、人口減少とは逆に約2,000世帯の増加を示し、全国的傾向にある核家族化が、この地域にも現われている。

人口減少傾向にあるこの地域も、人口の移動状況を見ると、社会減は続いているものの、減少率は年々低下し昭和40年には、自然増が社会減を上回って、約200人の人口増を示している。

これを本地域にある3市町についてみると館山市は、安房郡市の中心都市であるが、人口の推移は、ほぼ横ばい状態にある。白浜町は、従来、人口の著しい減少地域であったが横ばいから増加へと変わりつつあり、昭和44年には、社会増が約400人で、この地域の観光

第1表 世帯数、人口、人口の移動状況

区分		平次	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年
安房郡市	世帯数		10,939	△41,476	41,851	42,274	42,457	42,844
	人口		175,880	174,152	173,230	172,635	172,821	169,768
	移動状況	総数	…	△1,728	△922	△595	196	—
		自然増減	…	65	643	856	643	—
		社会増減	…	△1,793	△1,565	△1,451	△457	—
館山市	世帯数		13,741	14,139	14,310	14,516	14,463	14,680
	人口		55,866	55,820	55,830	56,002	55,692	55,236
	移動状況	総数	…	△46	10	172	△310	—
		自然増減	…	126	243	423	247	—
		社会増減	…	△172	△233	△251	△557	—
白浜町	世帯数		1,959	1,977	2,004	2,064	2,167	2,101
	人口		8,118	7,980	7,932	7,886	8,312	7,895
	移動状況	総数	…	△138	△48	△46	426	—
		自然増減	…	△10	18	△5	33	—
		社会増減	…	△128	△66	△41	393	—
千倉町	世帯数		3,807	3,826	3,832	3,868	3,888	3,926
	人口		17,381	17,254	17,029	16,987	16,905	16,734
	移動状況	総数	…	△127	△225	△42	△82	—
		自然増減	…	7	108	90	74	—
		社会増減	…	△138	△333	△132	△156	—

(千葉県統計年鑑による。なお、昭和45年世帯数は国勢調査概数である。)

開発の進展の影響がみられる。また、千倉町は、過去5年間で人口は約600人減少している。これは、この町が主産業である漁業就業者が多いため、他産業への転出、後継者の減少によるものと思われる。

このように本地域の人口が減少あるいは停滞気味であるのは、農漁業中心地帯であり、労働力を吸収する場がないため、他地域へ転出することによるものである。今後、開発の進展により遂次増加していくものと思われる。

III 地域の特徴

1. 自然的特性

「館山」図幅は、県下で最も温暖な気候を有し、一部に、無霜地帯がある。また、三面が海のため、海岸線は、変化に富んだ複雑な岩石海岸に一部砂浜地帯を加えた豊富な自然的観光資源をもち、気象条件に恵まれた南国的ムードを有している地域である。

(1) 地勢

本図幅の地形は、大部分が丘陵性の山地でおおわれており、標高は、200メートル前後とさほど高くはないが、谷が狭く入り込み、複雑な丘陵地帯を形づくっている。そのため、平坦地はほとんどみられず、主な平野は、北部に館山平野があるのみである。

海岸地帯は、海岸段丘が発達しており、海岸線は小湾凹、小岬、小島群、砂浜、岩礁等の連なった変化に富んだ地形をなしている。

これらは、房総半島を構成する新第三紀層による複雑な断層によってできたものである。

また、河川をみると、この地域には、大河がなく丘陵地帯中央部の谷あいから端を發した汐入川、長尾川、川尻川の2級河川が主なものであり、勾配が比較的急であるほか流路延長が短いため、その流量はいたって少ない。

(2) 気象

一方、気候面をみると、この地域は南部、東部が太平洋、西部が浦賀水道と三方が海洋に囲まれているため、気候上に大きな影響を与え、沖合を流れる暖流黒潮の影響をうけて1月の平均気温は、5℃～7℃、夏は、比較的涼しく24℃前後と暖冬夏涼の海洋性気候をもっている。

ことに、本地域は、高緯度にもかかわらず、年間を通じて気温差が少なく、四国の高知

市あるいは九州の宮崎市と類似した亜熱帯性の気候をもっている。このほかの特色としては、年間を通じて、南西あるいは西よりの季節風が強く、月の半数は強風に見舞われており、雨量も年間約1700～1900ミリメートルとやや多く多湿地帯でもある。

第2表 月別平均温度降水量

(昭和44年館山測候所調べ)

種別 \ 月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温(℃)	6.7	6.6	8.2	15.0	18.5	20.5	23.5	25.8	22.3	16.5	12.7	8.1
降水量(mm)	75.5	175.0	200.5	69.5	119.5	387.0	103.5	206.0	77.5	320.5	131.5	32.0

第3表 平均湿度、平均風速、風速最大および降水量

(昭和44年館山測候所調べ)

種別 \ 年別	平均湿度 (%)	平均風速 (m/s)	風速最大		降水量 (mm)
			速度 (m/s)	風向	
39	71	2.6	16.1	S W	1,423
40	69	2.9	14.7	WN W	1,783
41	74	2.7	17.6	WS W	1,929

(3) 動植物

黒潮の影響を受けて、温暖な気候を有している本地域は、植物の生育が盛んである。南端沿岸の西部に位置する平砂浦一帯には、ハマユウの大群落があり、そのほかハマグルマイソギク、ハマイチョウ、ハマエンドウ、ハマナタマメ、ハマヒルガオ、ハマユリ、ハマカンゾウ等の海浜植物が数多く生育している。また、白浜附近の磯根地先の海面下では、海藻類が着生し、イシゲ、イワヒゲ、マツモやジョロモク、アカモク等のモク類などが繁茂し、魚類の生息適地になっている。

山間部では、一帯が塩風に強いシイの木に、タメブ、モクノキ、アカガシ等の広葉樹林が混って生育し、暖温带林の特徴を表わしている。

一方、動物は、三面が海に囲まれている関係上、魚介類が多く、特に暖海性のものが多く、海女で有名な白浜の岩礁海岸地帯では、アワビ、サザエ等の貝類が豊富である。

鳥類は、本地域が気候に恵まれて、かつ、自然がよく保護されているため、野生鳥類の適地となっており、種類、数とも多くの鳥類が生息している。

特に館山市大神宮の暖帯林には、鳥獣保護区として、県鳥であるホウジロやカケス、メジロ、シジュウカラ等、数多くおり、かつまた、サンショウクイ、ツバメ、サシバ等の渡り鳥の経路として、多くの鳥類が集る所である。

しかし、哺乳類は、ほとんどみられず、リス、ノウサギ等がわずかに生息しているのみである。

2. 社会経済的特性

本地域は、県下でも最も袋小路性が強く他地域に比べ交通網の整備が遅れ、産業の開発はほとんどみられない。歴史的には、文化が進んでいたところであるが近年の急激な都市化、工業化の進展している首都圏にあって、本地域は、その影響がおそく、今日ようやく開発の手がのびようとしている。

安房地域は、館山市を中心に第1次産業である農業、水産業を主な産業として、発展してきた。館山市は、本地域の中心都市としての役割りをなし、市街地を形成しており、また、第2次、第3次産業も本地域内の他の2町に比較して集中しており、同市就業者の6割強を占めている。しかし、工業は立地条件が悪いため、企業の進出はあまりみられない。

千倉町、白浜町は、耕地面積が少ないため、農業経営規模は極めて零細である。その反面、水産資源が豊富であり、この地域一帯は水産業が活発である。ことに千倉町では、水産業が産業の基幹をなしている。

このような背景にあって、本地域は、自然条件に恵まれた地域として脚光を浴びつつあり、白浜地域を中心とした観光産業の進展とともに、次第に変ぼうしようとしている。

(昭和40年国勢調査による。)

第4表 就業構造

産業構造	市町村		安房郡		山市		白浜町		千倉町	
	人数	シエアー (%)	人数	シエアー (%)	人数	シエアー (%)	人数	シエアー (%)	人数	シエアー (%)
総計	86,238	100	26,727	100	4,289	100	8,254	100	4,705	57.0
第一次産業	42,963	49.8	9,233	34.5	2,363	55.1	4,705	57.0	2,936	35.6
農	34,833	40.4	7,810	29.2	1,990	46.4	2,936	35.6		
林業・狩猟業	270	0.3	47	0.2	8	0.2	20	0.2		
漁業・水産養殖業	7,860	9.1	1,376	5.1	365	8.5	1,749	21.2		
計	11,067	12.8	4,347	16.3	334	7.8	1,076	13.1		
第二次産業	306	0.4	63	0.3	-	-	1	0.0		
建設業	3,690	4.3	1,391	5.2	228	5.3	361	4.4		
製造業	7,071	8.2	2,893	10.8	106	2.5	714	8.7		
計	32,179	37.3	13,141	49.2	1,590	37.1	2,470	29.9		
第三次産業	12,284	14.2	4,902	18.4	463	10.8	1,156	14.0		
卸売業・小売業	900	1.0	434	1.6	20	0.5	46	0.5		
金融・保険・不動産業	4,698	5.5	2,006	7.5	355	8.3	388	4.7		
運輸通信業	241	0.3	127	0.5	4	0.1	15	0.2		
電気・ガス・水道業	11,153	12.9	4,150	15.5	680	15.8	717	8.7		
サービス業	2,903	3.4	1,522	5.7	68	1.6	148	1.8		
公務	29	0.0	6	0.0	2	0.0	3	0.0		
分類不能										

IV 主要産業の概要

1. 農業

この地域の気候は、温暖多雨であり、とくに夏涼冬温という自然条件に恵まれ、農業経営にはきわめて好環境にあり、水産業とともにこの地域の主産業を形成し発展してきた。

主要農作物についてみると作付面積では、水田稲作が主であるが、最近国の米作生産調整等もあり減産傾向にある。

野菜類では、果菜類とくにキュウリは産地指定の館山市を中心に生産が拡大されており、イチゴも成長作物として注目されている。果樹については、果樹基幹産地開発育成事業の推進により、ピワ、ミカン類が主幹作物として生産が拡大されつつある。

花卉類は、天恵の自然条件を活用して海岸地域に特産として露地栽培が行なわれてきた。

しかし、近時の需要の増大に伴い最近では、ビニールハウス、温室による栽培が活発化しており主要作物として生産の拡大が進められている。

近時経済の高度成長に伴う労働力の不足現象は、この地域にもおよび、専業農家の減少、若年労働者の流出が問題になっている。

2. 水産業

この地域の、沿岸一帯は岩礁が多く自然の魚床に恵まれており、さらに暖流の影響をうけて回遊魚、磯根魚ともきわめて種類が多い。

漁業形態をみると、館山市は、船形漁港を拠点としたあぐり網による沖合漁業、館山湾を中心とした定置網による沿海漁業、外房の磯根魚を中心とした沿海漁業が盛んであり、白浜町は、漁業就業者人口にもみられるように海女による磯根魚を中心とした沿海漁業が盛んである。これは観光資源としても貴重で、地元観光の発展に大きな貢献をしている。また、千倉町は、千倉漁港を拠点とした沖合漁業と磯根魚を対象とした沿海漁業が盛んであり、とくに千倉漁港は、この地域の沖合漁業の要となっている。また、磯根魚の安定を図るための当町に県営水産種苗センターが設置されている。

しかしながら今日では、これら恵まれた漁業資源も濫獲等の弊害が現われ漁獲高は全般的に減少傾向にあり、さらに経営規模の零細性による生産性の停滞、産業構造の変化に伴う若年労働力の他産業への流出等これからの水産業にとって抜本的な対策を講じなければ

ならない問題が生じている。

3. 商業

房総半島南部の商業は、館山市を中心に近隣農漁村を後背地とした商圏を形成し発展してきた。しかし近年は、情報化の進展、生活水準の平準化、交通体系の整備等に伴い購買力を千葉市等大都市商圏に指向させる傾向があり、また人口流出傾向が強くなり、商業の基本的な問題である購買力の減少および商業従事者の不足を生じてきており、商業の発展は停滞気味である。

一方、最近、観光レクリエーションの進展という全国的な動向に呼応して南房総の観光客は急速に伸びており、この地域の商業振興策を示唆している。

4. 観光

本地域は、東京湾および太平洋に囲まれ、内房、外房を通じた海岸線は、変化に富んだ数多くの自然景観が存在している。また、この地域は気候温暖で、県花にも指定されている菜の花をはじめ花木が多く栽培され、年間を通じて花畑に囲まれている。

これらを個別的にみると、館山市は、鐘のようになめらかな館山湾を中心とした海水浴場が、夏期レクリエーションのメッカになっており、このほか平砂浦の南房パラダイス等、観光施設も整備され通年の利用客も増加の傾向にある。白浜町は、房総南端にある野島岬灯台のほか海女による観光漁業も有名であり、館山市と結ぶ県営有料道路房総フラワーラインによって観光のイメージアップをしている。これに隣接する千倉町も海岸の景観に恵まれ、夏期の海水浴客も増加している。

このように、この地域の観光資源は豊富であるが、夏期を除いては拠点となる観光地に乏しいので、この対策として、連鎖的観光地を形成するための観光ルートの整備、地場産業と観光との関連、観光資源の保護育成、観光道路の整備等が進められている。

V 開発の現況

本地域は、本県においても最も袋小路性の強い地域である。すなわち、房総半島南部の道路、鉄道等をはじめ開発は、房総半島の沿岸沿いに遂次南下の形で発展してきたため、道路、鉄道等交通体系の立ち遅れがめだち、他地域に比して開発の進展も遅れ、所得、生活環境等の格差がみられている。

しかしながら、近時、首都圏における一大観光レクリエーション地域として脚光を浴びてきており、これにともない道路・鉄道等交通体系は急速に改善されつつある。

1. 道路，鉄道

本地域の主要道路は、国道2路線，主要地方道2路線，一般県道10路線である。国道は本地域の北部を東西によぎり、道路ネットワークの大部分はこの国道から分岐した主要地方道、一般県道により構成されている。

主要地方道は、館山白浜線、白浜南三原線の2路線がある。館山白浜線は、本地域南部丘陵地を西岬丘陵と出野尾丘陵とに2分するように貫き布良の海岸を経て白浜に至っており引続き白浜南三原線が、白浜から海岸線を通り、千倉を経て国道128号線へ通じている。2路線とも国道から分岐し南部主要村落を結び本地域では重要な道路であり、路面もほとんど舗装され、一部県営有料道路「房総フラワーライン」として整備されつつある。

また、一般県道は主要地方道から分岐し各村落を結んでおり、その主要なものは、館山長尾線、南安房公園線、館山千倉線、館山大貫千倉線の4路線で、本地域内を縦横断しているが、整備状況は、主要地方道に比べ遅れているのが現状である。

しかし、近時本地域の道路は、観光を主体とした経済活動の活発化により、舗装改良等、著しく整備されつつあり、特に外周する部分については、房総フラワーライン第1、第2の建設により快的なドライブが可能となってきている。

鉄道については、本地域の北部を房総西線が横断しており、すでに千倉までの電化が昭和44年7月に完成している。

また46年7月には鴨川まで、さらにこれにつづく房総東線の鴨川、蘇我間の電化が47年7月には完成する予定であり、本地域から房総東西線による。都心までの時間距離は著しく短縮されることになっており、本地域開発の可能性は大きい。

2. 港湾

本地域には、地方港湾としての館山港がある。本港は、館山湾の東隅に位置しているので、波浪の進入もなく、港湾立地として恵まれており、この地域の大部分を勢力範囲としている。

本港は現在までに水深5mの岸壁1バース、水深4～2mの物揚場が378mと防波堤590mの整備が完成しており、港勢は昭和40年度20万トン、昭和43年67万2千トンと活発化しつつある。

しかし、まだけい留施設は小規模であり、大型船舶の入港は困難となっている。

3. 漁港

本地域は、三面が海に囲まれているため、漁港は、大小あわせて25の漁港があり、地元水産業の振興に寄与している。このうち、2種以上の漁港は宮崎、船形、千倉、乙浜の4港であるが、近時における船舶の大型化、遠洋漁業への転換等に対処するため、これらの基幹漁港については、特に重点的な整備が図られなければならない。

4. 水資源

本地域には、2級河川の汐入川、長尾川、川尻川の3河川があるが、いずれも流域が狭くかつ、勾配が急なため、流出が早く、水資源として活用するための条件には恵まれていない。

現在、開発されている河川は、長尾川上流部に白浜町営水道としてのダムがあるのみでその他の河川は開発されていない。

本地域は、地下水が乏しいので、今後における各種開発を控え、水資源の確保は急務である。

5. 開発の方向

豊富な観光資源に恵まれた本地域は、今後、千倉バイパス、房総縦貫道路の建設促進等交通ネットワークの形成とあいまって、首都圏における観光レクリエーション地域として開発を進める。その際、本調査の成果を十分に取り入れながら、地域の観光資源の特色を十分に生かした整備を図っていくものとする。

各論

I 地形分類図

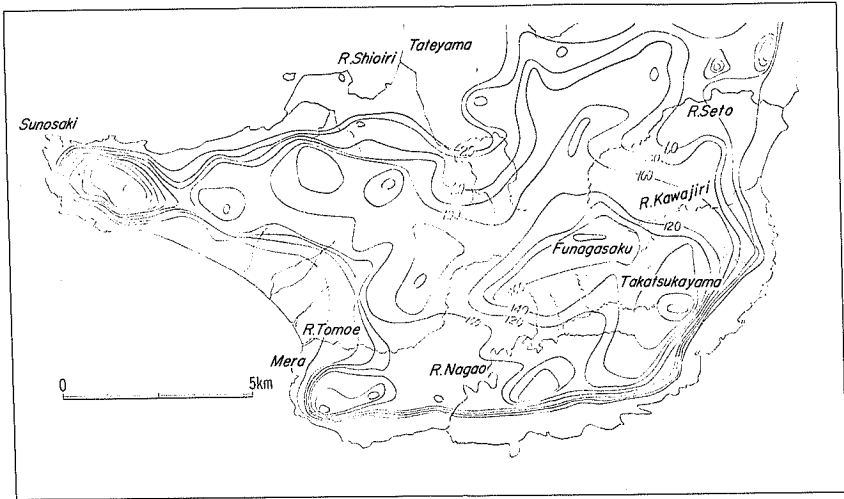
「館山」図幅地域は、限界適応単位まで開析された丘陵性の山地とその周囲を海岸段丘がとりまいているところである。本図幅の地形変動は、出野尾海侵群（1300～1400）と呼ばれているものから、慶長（1604）、元禄（1703）の地震、さらに関東地震（1923）から現在まで続いているといつてよからう。

本地域の地形の特長をみるため第2図のような切峰面図をつくってみた。この切峰面図にあらわれた地形をみると80mの等値線を境として急斜面と広い平坦面に分かれ、120m以上の高地は船ヶ作、高塚山、洲崎と布良付近にあって広い平坦面の上に孤立丘となって散在している。汐入川、巴川、長尾川、川尻川、瀬戸川など本地域の主要河川は、船ヶ作、高塚山を中心として主流は切峰面の谷すじに沿うて流れ、支流は切峰面の斜面を直角に切つて流れている。他の小河川にも同じ傾向がみられる。

次に本地域の特長は、丘陵地をとりまいている数段の海岸段丘である。その最も典型的なものは、千倉～白浜間にある海岸段丘であろう。本図幅の段丘の配置から、当地域には大きな地殻変動とはいえないが、太平洋側に広い海岸段丘を形成し館山湾側に小規模の海岸段丘を形成するような隆起運動があったといえる。また、小規模の崩壊地形が多く、その分布している場所をみると、表層地質図の中の砂岩地域と泥岩・砂岩互層地域の分布範囲と一致しており、谷密度の高いところ（開析が進んでいるところ）とは必ずしも一致していないことがわかる。

本図幅を次のような地形区に区分した。

- | | |
|-------|-------------------------------|
| I 丘陵地 | I _a 西岬丘陵 |
| | I _b 館山南部丘陵 |
| | I _{b1} 出野尾丘陵 |
| | I _{b2} 船ヶ作丘陵 |
| | I _{b3} 大貫丘陵（丸山丘陵を含む） |



第2図 切峰面図

起伏量作業の方眼（図幅を縦横20等分した）の中の最高点を読んで、各方眼の値から等値係線を引いた。等値線は20mとしてある。

- II 低地
- II_a 館山低地（沼～洲崎海岸段丘を含む）
 - II_b 千倉～白浜海岸段丘
 - II_c 平砂浦低地
 - II_d 瀬戸浜低地

1. 丘陵地（H_l, H_s）

1-1 西岬丘陵（I_a）

館山より谷藤原～宮ノ町～藤原を通る県道より西側にある丘陵性の山地である。西端の洲崎付近には西岬丘陵のなかでもっとも高い独立丘陵（194m）がある。この丘陵は周囲を岩石段丘に囲まれているが湧水箇所が多く段丘の上にある波佐間、坂田、洲崎、

西川名、伊戸、根本等の部落に対して重要な飲料水の供給地となっている。194 m の独立丘陵の東側には標高100 m、比高60~80mの丘頂が集合し、館山側と平砂浦低地側の分水界をつくっている。東西方向に並んだ丘陵には切れ込みの深い沢が入り乏水性のためこれらの沢の奥は大部分が貯水池となっている。また西岬丘陵の南縁、平砂浦低地に面する斜面はすべて砂（多分飛砂）によっておおわれ、布沼、坂井間では標高100 mの丘頂付近まで1 m以上の砂におおわれている。

1-2 館山南部丘陵（I_b）

当地域を出野尾丘陵（I_{b1}）、船ヶ作丘陵（I_{b2}）、大貫丘陵（I_{b3}）の3つの小地形区に分けた。

出野尾丘陵（I_{b1}）：西岬丘陵に隣接してあり全体として西側が低い。丘頂はすべて丸味があり丘頂と丘頂の間は円形の凹地となっているところが多い。5万分の1地形図では丘陵の比高60~80m、標高100m付近に広い平坦面があり、2.5万分の1図上でみるとこの平坦面は丘陵の南、佐野付近の低地に向って緩く傾いている。丘陵の東側、巴川の谷に面するところは、西側に比べて開析が進んでおり小さい谷が多い。これらの谷頭付近には湧水箇所が多く飲料と農業用水を兼ねている。

船ヶ作丘陵（I_{b2}）：切峰面図では長尾川北側にある船ヶ作付近の160 mの等値線で囲まれたところと、長尾川の南側にある高塚山を中心とした160 mの等値線で囲まれたところ、自浜付近にある標高143 mの城山を中心とした120 mの等値線で囲まれたところ、および布良付近の148 mの標高をもつ独立丘陵が当地域の中心地塊である。船ヶ作丘陵は全体として等高性の丘頂をもつ多くの尾根に分割されているが船ヶ作、神余畑付近には開析から残されたところが平頂峰となって残っている。当地域の主要河川のうち長尾川は深さ20~40mに及ぶ穿入曲流谷をつくって流れところどころに繞谷丘陵が見られる。

船ヶ作、高塚山地塊の北側の流れる汐入川、瀬戸川、川尻川、西側を流れる巴川も曲流しているが規模が小さい。

以上の河川の曲流形態や穿入状態からみると、船ヶ作丘陵地域では、長尾川、巴川の流路に沿って河床の位置や勾配を変える程度の隆起運動があり、その他の河川でもわずかにこのような傾向を認めることができる。

次に丘陵の周縁をみると、南側（白浜町）は、東西方向にのびる直線状の急崖となり、

東側（千倉町）も北東—南西にのびる急崖となって終わっている。丘陵の北側は、館山低地と瀬戸浜低地に向ってゆっくりと丘頂高度を下げるようにして小丘陵が連なり沈降海岸が隆起した地形に似ている。船ヶ作丘陵の南西端、布良付近には前述のように標高148 mの独立丘陵がある。丘陵を刻む谷は深く入組み谷密度は高い。丘陵の南側は東西方向に走る直線状の急崖となり、北側は小丘陵にまで開析されている。

大貫丘陵（I₆）：船ヶ作丘陵の北にあり、船ヶ作から北に向ってのびる尾根すじに対して直角に交わる（ほぼ直角方向にのびる）尾根をもった丘陵と、その続きである房総西線の東側にある丸山丘陵までと範囲を一つの地形区とした。丘陵の奥深くまで入る幅の広い谷底と谷底面を深く刻む水流、丘陵末端の低地の中にある小さい独立丘……など地形の全ぼうは沈水海岸が隆起したような形態をもっている。

丸山丘陵は標高も比高も斜面形も良く似ているが谷系は細かい樹枝状である。丸山丘陵の東には標高102.6 mの峰山の小丘陵があり峰山の東側は南北およそ2 kmにわたる直線状の急崖となっている。

2. 低地

2-1 館山低地（II_a）

館山南部丘陵と西岬丘陵の北に広がる低地である。この低地は詳しく観察すると何段もの広い段丘面があり、砂丘列がある。館山低地の砂丘列は現在の海岸線に沿ってある。海岸寄りにある一番新しいのが第1砂丘、館山低地の奥（東側）に行くにしたがって古い砂丘となる。第一砂丘は海岸に沿って、第二砂丘は現在の館山の市街地がのっているところ、順次東に北条町、上野原、安布里、萱野、国分がのっているところ……など大きなもので5～6列を数える。これらの砂丘列は海岸から東に向うにしたがって砂から泥に変わってゆく。砂丘列の間の砂州間低地（I₆）の記号のところはback marshで地下水位が高く海岸に近くなるほど湿地が多い。

汐入川から西、西岬丘陵の北縁に沿って沼付近から洲崎付近の低地は新しく地形区を設けるべきであるが、ここではいちおう館山低地の分類の中に入れてある。この地域は数段の段丘が館山湾側に向って配置しており、丘陵から出る水流は2～5 mの深さに谷底面

で海に出る。典型的な隆起海岸の地形である。前記したように沼の珊瑚礁の時代は出野尾の洞穴および周縁の遺跡をくわしく調べた最近の調査からみると古墳時代以降ということが明らかになった。(したがって、このあたりの低地(館山低地をも含めて)ができあがったのは非常に新しい時代ということになる。)

2-2 千倉, 白浜海岸段丘 (II_b)

館山南部丘陵の南縁をとりまく幅1kmの段丘状のところである。4~6段の平坦な段丘面からなり、その表面は、砂で薄くおおわられたいわゆる典型的な岩石段丘である(第3図航空写真参照)。段丘面は、大部分耕地となり畑地と水田が交錯している。数段ある段丘面の中で標高4m付近にある面が、元録(1703)、慶長(1604)の地震の際隆起してできあがったと考えられている。江線付近で磯波が砕けるところにある平らな岩棚が関東地震(1923)のとき隆起したところといわれている。

第4図は、白浜付近の航空写真第3図を判読した結果である。白浜町付近のこのような海岸に面する急崖については従来いわれているように海食崖とするよりも構造的な影響を強く受けた結果と考えた方がよいのではなかろうか。次に千倉、白浜海岸段丘地域の特長として、長尾川を境として東側野島崎より千倉の海岸までは、岩石海岸が多く、西側の根本から布良の海岸は厚い砂(砂丘)におおわれている。千倉、白浜海岸段丘と洲崎付近の海岸段丘の違いを比べてみると第5図のようになる。

2-3 平砂浦低地 (II_c)

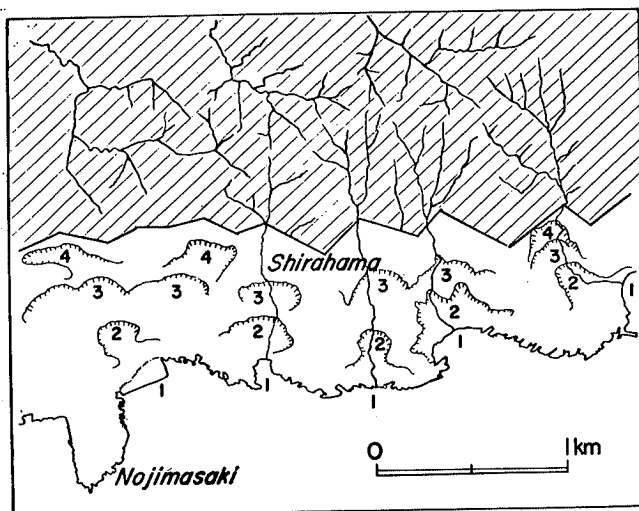
布良の港より北西側、約4kmにわたって弧を描くところが平砂浦、その東側一帯西岬丘陵の南側に広がる低地である。海岸に沿う幅400mほどの砂丘帯とこれに並行する小さい砂丘列が平砂浦低地の前面に防波堤のように横たわっている。平砂浦低地の基盤は非常に浅いところにあり、しかも平坦なひろがりぐあいや形態をみると、基盤の上に新しい堆積物をのせたまま隆起した地形、物をのせたまま隆起した地形、つまり海岸段丘であるといえよう。

2-4 瀬戸浜低地 (II_d)

千倉、白浜海岸段丘は、千倉町の北、川尻川までが地形区で、川尻川より北、丸山町との



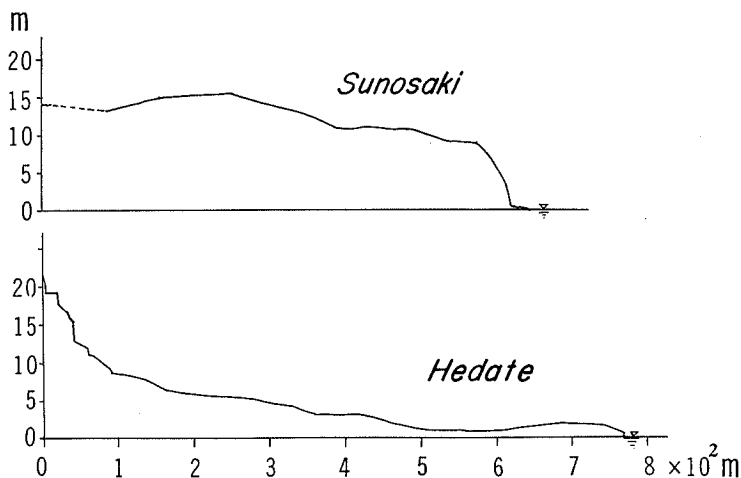
第3図 白浜付近
の航空写真



第4図

第3図の航空写真から判読した白浜付近の海岸段丘と背後の丘陵に入る谷の特長。1～4

の数字は馬蹄形の凹地で 1は現在の入江, 2～4は入江であったところ, 4が最も高い位置にある。館山南部丘陵の南線は白浜付近では鋸歯状の急崖となって段丘面に接し, 段丘面と丘陵を南北に貫く直線状の割れ目が入っている。谷は割れ目に沿っている。



第5図 洲崎付近と平館付近にある段丘の比較

段丘面は西岬丘陵西端では海岸より急に高く、千倉・白浜海岸段丘の北縁平館付近では10m以上の面は極端に狭くなり、10mより低い面が広がる。

境界を流れる瀬戸川までと瀬戸川下流の高側、西原、馬場、稲子沢などの部落がのっている段丘面を含めたところを瀬戸浜低地とする（対岸の丸山町白子付近の海岸低地については別に扱うことにする）。大部分は、砂浜海岸で岩盤が露出しているところは少ない。海岸線に沿って幅50～100m以下の細長い砂丘が並行してほぼ等間隔に5列ほどあり、砂丘列をつくっている。この砂丘列は、瀬戸川対岸の白子付近にも追跡することができる。砂丘列は、海岸より離れるにしたがって標高がわずかに高く、最も西側、海岸から約1kmの稲子沢付近で20mである。

瀬戸浜低地では地下水面は高くG.L. 3～5mのところが多い。基盤は地表から5～10mのところ、ひろがっておりこの基盤の上に丘陵から分離されたように小さい丘がある。

後記

利用される方に：地形分類図の各地形区について述べてきたが、くわしいことは次の水系谷密度図、起伏量図、傾斜分区分の各図の項を参照して頂きたい。なお、記載中にいろいろの図を入れてあるが地域に対する説明は1枚の図では十分ではないので各図を相互に比

較対照してはじめて地域の性格をは握していただきたい。

(千葉大学・文部教官 川崎逸郎)

〈参考資料〉

神尾明正，森谷ひろみ（1962）：海岸段丘の発達と遺跡立地との関係について—第2報—
千葉大学文理学部記要（第3巻，第4号）

川崎逸郎（1963）：安房郡の地形，千葉県史料，原始古代編安房国（33～39頁）

千葉県統計年鑑（1970）：千葉県

II 表 層 地 質 図

本図幅地域は房総半島の南端部にあたり、地質構造的には、丹沢嶺岡隆起帯より南に存在した房南地向斜の堆積物を主体としている。この堆積物は新第三系であって、主として山地、丘陵地を構成しているが、海岸平野は沖積統に属する砂および泥の堆積物から構成されている。

山地の頂上近くには、部分的に、浸食により残された洪積統のローム層が新第三系をおおって分布しており、また、平砂浦から北東に続く山地、丘陵地には、沖積世の風成と考えられる砂が表面にのっている。

本地域の地質層序は第5表のようであるが、地質構造は一般的に東西に近い方向のものが多く、地層の分布を始めとし、背斜軸、向斜軸もこの方向に伸び、そのくり返しがみられる。

第5表

時 代		層 群		地 域		西 部	中 ~ 東 部
				地 層			
第 四 紀	沖積世					沼 サ ン ゴ 層	ロ ー ム 層
	洪積世						
新 第 三 紀	鮮新世	上総層群	関	豊 房 層			豊 房 累 層
	中新世			三浦層群	豊岡	千 倉 層 (断層)	鏡ヶ浦凝灰質互層 (断層)
			安房	西 岬 層		西 岬 シ ル ト 岩 層	

また、各層とも岩相の変化は著しく、層間褶曲なども多く観察される。各層相互の関係は不整合または断層により境されていることが多い。

この地域は、歴史時代に入つての変動も著しく、地震による隆起変動はよく知られ、その結果形成された、何段もの海岸段丘が南端の地域で見られる。

1. 未固結堆積物

1-1 泥がち堆積物 (m)

泥がち堆積物は、丘陵地を刻む谷の中および、海岸低地の水田となっている地域で見られ、主としてシルト質物質から構成されている。その厚さは、全般的に薄く、1~4mぐらいで砂に移り変わったり、岩盤の新第三系になっている。

館山市周辺の海拔15~20mの山裾には、沼サンゴ層と呼ばれるサンゴや貝を含んだ地層が泥層に伴って産出している。この地層は、館山市の沼を始めとし、宮城、香、真倉、岡田、大戸、南条などの各地に知られ、サンゴ化石75種、貝化石124種が記載されている。

1-2 砂がち堆積物 (s)

この地域の砂がち堆積物は、平砂浦、千倉町瀬戸浜などに広く分布する海岸堆積物が大半であつて、平砂浦北東の丘陵上にある砂丘堆積物も含められる。

瀬戸浜、平砂浦はともに砂鉄埋蔵地域とされ、部分的にFe分の多いところがある。砂層の厚さは一般に薄く、1~1.5mで基盤岩に達するものが多いが、ところによって4~6m以上の厚い地点もある。

砂の粒度組成、鉱物組成は第6表、第7表のようである。

第6表 粒度組成 (重量百分率)

産地 \ 粒の大きさ (mm)	8~4	4~2	2~1	1~1/2	1/2~1/4	1/4~1/8	1/8~1/16	1/16以下
千倉町瀬戸浜	—	—	4.4	16.0	65.8	8.0	3.6	2.2
館山市出野尾字高砂 (破丘)	0.4	0.7	1.4	14.9	43.4	34.7	3.8	0.7

第7表 鉱物組成 (1/4~1/8 mm粒の容量百分率)

産地	鉱物の種類				重鉱物の種類				
	岩石片	石英	長石	重鉱物	カクセ ン石	ミ ン 輝石	フ ウ 輝石	鉄鉱物	その他
千倉町瀬戸浜	24.0	25.3	19.0	31.7	2.7	34.7	44.0	16.0	2.6
館山市出野尾字高砂 (砂丘)	40.8	5.8	20.4	63.0	2.0	40.8	44.9	11.3	1.0

1-4 ローム層

本地域の山地の頂上付近に、淡褐色を呈する、火山灰風化層とみられる、いわゆるローム層が存在している。図中の赤実線で囲んである範囲がこれで、一般に厚さ1~2mぐらいで表面をおおっているが、館山市船ヶ作付近では数mにもおよんでいる。

前述の砂丘の砂によってローム層がおおわれているところもみられるので、洪積世における火山灰の降灰による堆積物と推定される。

2. 半固結~固結堆積物

2-1 泥岩1 (ms1)

新第三系豊房層中に砂岩と互層をなし産出する。標式地の館山市西長田を中心とし、北東~西南方向に分布を示す。

岩相は灰白色のシルト岩で、貝化石が散在的に含まれている。全体として固結の程度は弱く、ハンマーやピックルの先でけずり取れるぐらいの固さである。

2-2 砂岩 (ss)

豊房層中で泥岩と互層している砂岩、千倉層中の神余凝灰質砂岩、平館砂岩などからなる。

豊房層中の砂岩は、比較的北東部に多く、暗灰色凝灰質の砂を主体としている。砂粒はおもにガラス質の複輝石安山岩の岩片および単斜輝石、斜方輝石、角閃石、黒雲母、鉄鉱

物などからなり、中～粗粒のものが多い。

神余凝灰質砂岩は、畑～神余間の長尾川流域に広く分布し、畑互層と整合に重なり、同時異相と考えられている。岩相は暗灰色凝灰質の中～粗砂であって、ときにシルト岩をはさむことがある。

平館砂岩は、千倉町岡瀬田に分布し、青灰色の塊状の細粒砂岩と、スコリア質の粗粒砂岩からなっている。

前二者は、半固結で比較的やわらかいが、平館砂岩の塊状の細粒砂岩は、比較的かたく、N値でも100以上の値を示している。

2-3 礫岩 (cg)

礫岩として分布が示される程度の広がりのあるものは、館山市滝川にある豊房層の上部に相当する滝川含貝殻礫岩である。層厚約100 mであって、礫には古生層礫、シルト岩礫などが含まれ、大規模な層間異常現象も認められている。

2-4 泥岩砂岩互層 (altgsm)

千倉層中の畑互層および白浜互層がこれに相当する。

畑互層は、館山市山荻～畑間の道路を標式地とし、全体とし、千数百mの厚さをもち、厚さ数10cmの凝灰質灰白シルト岩と、薄い凝灰質砂岩とのリズムカルな互層をなしている。岩相の側方および垂直方向の変化ははげしい。また、*Neptuneasp*, *Nuculusp* などの軟体動物化石および *Epistomina*, *Nonion*, *Boliuinita*, *Eponides* などの底生有孔虫化石や *Globigevina nepenthes* などの浮游性有孔虫化石が産出する。

白浜互層は、白浜町小戸海岸を標式地とし、七浦、乙浜、館山市富崎などに分布している。畑丘層には整合におおわれており、層厚260 m以上とされている。岩相は表面赤褐色、内部暗緑青色の凝灰質砂岩を主とし、白色の頁岩をはさんでいる。この互層中から *Glycymeris yessoensis* が産出している。

2-5 泥岩2 (ms2)

この中に含まれる泥岩は、館山市西岬の坂田、洲崎間の道路に模式地をもち、本地域の西部に広く分布する西岬層のシルト岩および、千倉町揚島シルト岩である。

西岬層のシルト岩は、層厚2,000m以上におよび、豊房層に不整合でおおわれ、複雑な細かい褶曲構造を示し、破碎構造が顕著である。地質構造は上位にくる千倉層、豊房層とややことなり、北西～東南の方向を示している。

岩相は、塊状の灰白色シルト岩であって、凝灰質粗粒砂岩の薄層をはさんでいる。本層からは *Stilostomella*, *Nonion*, *Eponides* など有孔虫化石は産出するが、貝化石は報告されていない。

揚島シルト岩層は、豊房、千倉層で一部整合的におおわれているが、下部は断層によって不明となっている。岩相はもろい灰白色塊状のシルト岩を主とし、スコリア砂岩の薄層をはさんでいる。

岩石の全般的なかたさは、泥岩1よりかたく、*N*値で150 ぐらいの値を示すものが多い。

3. 火山性岩石

3-1 凝灰岩質岩石 (Tr)

この岩石には、千倉層中の連台枝凝灰角礫岩、野島岬凝灰質礫岩および、鏡ヶ浦凝灰質互層などがある。

連台枝凝灰角礫岩は、千倉町連台枝付近に分布し、畑互層とは同時異相の関係にある。層厚500 m ぐらいで、シルト岩の角礫が含まれている。

野島岬凝灰質礫岩は、野島岬西側だけに限られた分布を示し、白浜互層の上に整合にのっている。岩相はスコリアと円礫の混在する固結岩であり、*Chlamys miurensis* の化石が産出する。

鏡ヶ浦凝灰質互層は、館山市宮城、加賀名などに分布し、その岩相は黄褐～灰色の粗粒凝灰質砂岩が主体で、シルト岩をはさんでいる。

4. 地質に関連した事項

4-1 地下水

海岸地城などの沖積層中の地下水は、比較的浅く、その水量も少ない。現在、飲料用、かんがい用には、新第三系の砂層などにある帯水層を利用しており、館山市の各地で、35

～40m ぐらいにある帯水層から多く汲み上げられている。館山市谷藤原では130～135 mの帯水層まで掘り下げられ、295 トン/日程度の揚水をしている。

また、天然ガスに関連した塩水は、いわゆる鉱泉として知られ、千倉町朝夷の千倉鉱泉、館山市北条の館山鉱泉、長尾滝口大作の大作場物療鉱泉などがある。

これらの水質は第8表のようである。

第8表

(単位: mg / ℓ)

地名名	館山	乙浜	白浜	青木	千倉	大作場
地下水型	浅井水	井水	井水	井水	鉱泉	鉱泉
固形物総量	595.0	361.0	597.0	460.0	5624.0	—
H ₂ SiO ₃	67.0	45.5	57.9	70.2	57.2	82.3
Al ³⁺	4.0	0.7	2.9	1.5	2.4	—
Fe ³⁺	—	0.1	—	0.1	0.3	—
Ca ²⁺	68.4	40.0	51.5	58.2	82.8	—
Mg ²⁺	9.0	12.3	6.8	11.9	13.1	28.9
K ⁺	1.9	1.3	1.2	1.9	54.5	154.0
Na ⁺	147.9	79.1	153.1	78.9	1860.5	2310.0
Cl ⁻	52.3	43.6	88.9	73.2	2856.9	3368.0
S ₄ ²⁻	29.3	13.2	60.9	56.8	10.7	4.5
pH		7.8	7.3	6.9	8.1	8.1

4-2 地下資源

本地域では、地下資源として顕著なものはないが、天然ガス、砂鉄、砂利が考えられよう。

天然ガスについては、昭和15年ごろ館山市南条で、ガス徴が知られ、産出地層として西岬層と推定された。本図の全地域にわたって、天然ガスの鉱区になっているが、その量はわずかであって、昭和46年現在、開発されているものはない。

砂鉄についても、千倉町、平砂浦～白浜町一帯が埋蔵地域とされ、調査されたこともあるが、開発されているものはない。

砂利資源については、既述の館山市出野尾高砂を始めとし、砂丘性の沖積世の砂が、新第三系をおおって、平砂浦から北東に伸びた地域に分布している。昭和46年1月現在稼行している業者は7社あり、年間採取量は合計して約50万m³におよんでいる。基盤の起伏によって均一な厚さを示さないで、埋蔵量は決め難いが、今後相当量の開発は可能であろう。

(千葉大学・文部教官 近藤精造)

〈おもな参考文献〉

- 千葉県地学教育研究会（1963）：千葉県地学図集 第4集サンゴ編
 千葉県地学教育研究会（1968）：千葉県地学図集 第5集二枚貝編
 千葉県（1963）：20万分の1千葉県地質図
 浜田隆士（1963）：千葉県沼サンゴ層の諸問題 地学研究，特集号，94～119p
 成瀬洋・杉村新・小池清（1951）：房総南端——新第三紀層——
 地質雑 57巻 675号 511～525p
 成瀬洋・杉村新（1953）：巴川貝層・地質雑 59巻 690号 92P
 成瀬洋（1954）：豊房累層の堆積環境——房総南端その2——
 地質雑，60巻 708号 388～399p
 Saito, T. (1960) : *Miocene Planktonic formation from Honshu,*
Japan, Sci Rep, Tohoku Univ, 2nd ser, Vol. 35, No. 2, 123 ~209P
 山岸忠夫（1960）：温泉鉱泉の研究，房総半島における鉱泉の地質学的研究，
 山岸教授退官記念事業会

III 土 壤 図

1. 土壤の概要

本地域の土壤は、第三紀系の岩石の風化によると思われる壤粘質土を主体とし、丘陵上の一部に火山灰土、もしくは火山灰を混ざる土壤があり、沿海部からやや内陸にかけて砂丘性の砂質土およびこれを混ざる土壤がある。沖積地もこれらの材料を母材としたと思われる土壤よりなりたっている。また海岸の一部および島には、土壤のない岩石地が存在する。本地域に存在する土壤統の主な性質は第9表のとおりである。

2. 地域別の土壤の概要

本地域を「地形分類図」の地形区分にしたがって土壤の概要を記述する。

2-1 丘陵地の土壤

丘陵地の土壤は三紀系の母材とくに泥岩の風化物を主体とし、これに火山灰を混じたものもある。火山灰混合の有無と程度、腐植層序、乾燥などによって文違統から大井倉統までの11統に区分された土壤が分布している。

(1) 西岬丘陵

この地域の丘陵上は非火山性乾性褐色森林土の江田統を主体としている。この丘陵の西部から西南部にかけて1m以内に母材の基岩が出てくる白浜統の分布していることが特徴的である。この丘陵地を開析している谷部は下部は水田、上部は山林となっている。山林は非火山性の褐色森林土である高塚統が大部分である。水田は強グライ土壤壤粘質型の下総統が大部分であるが、一部に弱グライ土壤の馬立統も分布している。

(2) 出野尾丘陵

この地域の丘陵上が非火山性の乾性乾色森林土の江田統でしめられていることは前者と同様である。しかし、この地域は1m以内に基岩の出る白浜統の存在はきわめて少ない。この地域の特徴的な土壤としては、平砂浦低地の砂丘土壤が風により丘陵上に吹きあげられたものと思われる瀬統、三崎統が存在する。三崎統は砂丘の下に火山灰層の存在するものであるが、この地域には表土からの火山灰土である上砂統が小面積出現する。この地域を解

析した谷部の林地は主として高塚統で前者と同様であるが、水田は馬立統を主体とし、前者よりやや排水がよい。

(3) 船ヶ作丘陵

この地域は、本図中もっとも広い面積をしめている。この地域の特徴は丘陵上に火山灰がかなりの面積にわたってのこっており、表層の腐植層が流失した火山灰土であり乾性褐色森林土である上砂統が、非火山性の乾性褐色森林土の江田統について広い面積をしめている。その他小面積ずつであるが、厚層黒ボク土壌の文違統、八街統、小原統および火山灰の混合している諸持統、上岩入統など分布している。開析谷の林地は、北西部の館山湾にながれるものは火山灰の混合した適潤性褐色森林土の千倉統を主体とし、東南部のものは非火山性の高塚統が多くなっている。水田は①南西（平砂浦低地）、②北（館山低地）、③東（瀬戸浜低地南部）にながれる3つの水系は弱グライ土壌の馬立統が主体になっている。しかし、④北東（瀬戸浜低地北部）に流れる水系は強グライで粘質の強い夷隅統がしめられていることが異なっている。また、①および④の下流部には排水のすすんだ灰色土壌の米沢統、平三統の分布するのが特徴的である。また千倉、白浜海岸段丘に面する丘陵縁辺部に1m以内に基岩の出る白浜統が分布している。

(4) 大貫丘陵

この地域の丘陵上は非火山性の乾性褐色森林土の江田統が主体であることは前三者と同様であり、火山灰土の上砂統の分布することは前者と同様である。谷部の水田は強グライ土塊壤土型がほとんどである。

2-2 低地土壌

低地土壌は大別して砂丘系の礫統、神宮寺浜統、畑地を主とする褐色低地土壌（西岬統真倉統）と水田土壌・細粒灰色低地土壌（米沢統）、灰色低地土壌（平三統、塩浦統、馬立統）、細粒グライ土壌（夷隅統）、グライ土壌（下総統・黒部統）、粗粒グライ土壌（米沢統）となる。また、台地周辺部の畑地は丘陵地と同様の褐色森林土の江田統（乾性）横尾統（強粘、適潤）上砂統（乾性、火山灰）上岩入統（褐色黒ボク土壌）などが分布している。

(1) 館山低地

この地域は市街地と水田を主体としている。水田面積の大部分はグライ土壌の黒部統（強グライ土壌斑緑型・壤土）と細粒グライ土壌の馬立統（弱グライ土壌、強粘度質）の2

第9表 開発地域館山図幅土壤図土壤統一覧

土 壤 統 群	土 壤 統 名	色層序	腐植層序	砂礫層	酸 化 沈 積 物
岩 石 地		—	—	—	—
残積性未熟土壤	白 浜 統	YR/YR	な し	—	な し
粗粒残積性未熟	水 岡 統	YR/YR	な し	な し	な し
砂丘未熟土壤	神 統(畑)	YR/YR	な し	な し	な し
	神宮寺浜統(林地)	YR/YR	な し	な し	な し
	三 崎 統	YR/YR	な し	な し	な し
厚層黒ボク土壤	文 違 統	YR/YR	全層腐植	な し	な し
黒ボク土壤	八 街 統	YR/YR	全層腐植	な し	な し
	小 原 統	YR/YR	な し	な し	な し
淡色黒ボク土壤	諸 持 統	YR/YR	全層腐植	な し	な し
	上 岩 入 統	YR/YR	な し	な し	な し
乾性褐色森林土壤	江 田 統	YR/YR	な し	な し	な し
	上 砂 統	YR/YR	な し	あ り	な し
適潤性褐色森林土壤	高 塚 統	YR/YR	表層腐植	あ り	な し
	千 倉 統	YR/YR	全層腐植	な し	な し
	横 尾 統	YR/YR	な し	な し	な し
湿潤性褐色森林土壤	大 井 倉 統	YR/YR	全層腐植	あ り	な し
褐色低地土壤	西 岬 統	YR/YR	な し	な し	な し
	真 倉 統	YR/YR	な し	な し	な し

土 壤 統 群		腐 植 層 序	砂 礫 層	作 土 下	
				酸化沈積物	土 性
細粒灰色紙地土壤	米沢統	表層腐植層なし	な し	あ り	強 粘 質
灰色低地土壤	平三統	〃	〃	〃	壤 粘 質
	塩浦統	〃	岩盤あり	〃	壤 粘 質
細粒グライ土壤	夷隅統	〃	な し	〃	強 粘 質
グ ラ イ 土 壤	下総統	〃	〃	な し	壤 粘 質
	黒部統	〃	〃	あ り	壤 粘 質
	馬立統	〃	〃	〃	壤 粘 質
粗粒グライ土壤	水沢統	〃	〃	〃	壤 粘 質

土 性		母 材	堆 積 様 式	備 考
表 土	次 層			
岩 石	岩 石		残積	神宮寺浜統の方が粒子あらく層の分化がすすんでいない 火山灰に砂丘の砂のかぶったもの 山林 表土をかく火山灰 山林 山林(火山灰混) 畑 腐植層が厚いが火山灰ではないか
壤・粘	岩 石		崩積・残積	
砂	砂	半水	水積(海)・風積(非火)	
砂	砂	非水	水積	
砂	砂	非水	風積(非火)/ 風積(火)	
壤	壤	非水/ 非火	風積(火山性)	
壤	壤	非固結火成岩	風積(火山性)	
壤	壤	非固結火成岩	風積(火山性)	
壤	壤・粘	半水+非火	崩積・風積(火)	
壤	壤	非水+非火	崩積・風積	
壤・粘	壤・粘	半水+非火	崩積・風積	
壤・粘	壤・粘(強)	半水	崩積・残積	
壤・粘	壤・粘	非火	風積	
壤	壤	半水	崩積・残積	
壤・粘	壤・粘(強)	非火+非水	水積	
強 粘	(壤・粘) 強	半水	崩積・残積	
壤・粘	壤・粘	非水	崩積・残積	
壤(粘)	壤(粘強)	半水+非水	崩積・風積(非火)	
壤・粘	壤・粘(強)	半水	水積(河)	

黒泥泥炭	グライ	構 造	土層の配列	母材・堆積様式	備 考
な し	G ₀	な し	Gr ~ Gr	非固給水成岩・水積	
〃	G ₀	〃	Gr ~ Gr	〃	
〃	G ₀	〃	Gr ~ R	〃	
〃	G ₁ ~G ₂	〃	G ~ G	〃	強グライ土壤
〃	G ₁ ~G ₂	〃	G ~ G	〃	強グライ土壤
〃	G ₁ ~G ₂	〃	G ~ G	〃	強グライ土壤斑鉄型
〃	G ₃ ~G ₄	〃	X ~ G	〃	
〃	G ₃ ~G ₄	〃	X ~ G	〃	グライ土壤

※半は半固結 水は水成岩
非は非固結 火は火成岩

統でしめられており、地域北部の沖積地は黒部統、地域中部の沖積地は馬立統となっている。その他丘陵部への開析の谷部および小沖積は下総統（強グライ土壤壤土還元型）となっている。畑地はごく小面積しかないが、次の2つにわけられる。1つは丘陵周辺部の土壤で丘陵母材の残積もしくは崩積による土壤で、そのほとんどが江田統である。また、ごく小面積ずつ砂岩の風化物と思われる砂質の水岡統および火山灰を混ざる上岩入統が分布している。他の一つは沖積地の水田中に存在する畑地で、そのほとんどが壤質の真倉統である。また地区西部には三紀系泥岩の固化物と砂丘の砂が混合したものと思われる西岬統の分布していることがこの地区の特徴でもある。また沿海部には砂丘系の神宮寺浜統が存在している。

(2) 千倉白浜海岸段丘

この地域は村落地が多く、耕地は多くない。土壤は地域的に丘陵周辺、海岸、中間の3つに区分される。丘陵周辺は、丘陵母材による江田統の多く分布することは前地域と同様である。沿岸部には江田統より粘質の強い横尾統が分布している点がこととなっている。この土壤の存在がこの地区海岸土壤の特徴であるが、砂丘系の神宮寺浜統なども若干分布している。中間地帯は村落および水田が大部分である。水田はほとんどが乾田系の粗粒灰色低地土壤（米沢統）、灰色低地土壤（塩浦統）が主体になっている。塩浦統は1m以内に基岩が出現する特徴的な土壤である。また海岸、島には岩石地が存在する。

(3) 平砂浦低地

この地域の土壤の特徴は砂丘系の土壤がその大部分の面積をしめていることである。粒子があらく層の分化がすすんでいない神宮寺浜統がもっとも多く、やや内陸部に入るとやや粒子のあらさが小さくなり、層の分化のやすすんだ礫統が存在している。海岸から1kmはほとんど神宮寺浜統で水田はそれより内部へ入らないと少ない。水田はそのほとんどが粗粒弱グライの水沢統である。

(4) 瀬戸浜低地

この地域は河域沖積地を主体とし水田面積のしめる割合が多い。水田は強グライ壤質土の下総統、弱グライ粘質の馬立統とならんで乾田の粗粒灰色低地土壤である米沢統の存在することが特徴的である。畑地は火山灰の混合している上岩入統がかなりの面積をしめていることが特徴的である。その他丘陵周辺には江田統、海岸部に砂丘系の神宮寺浜統の存在することは他地域と同様である。

3. 総括

以上のことを整理して表にすると第10表のとおりである

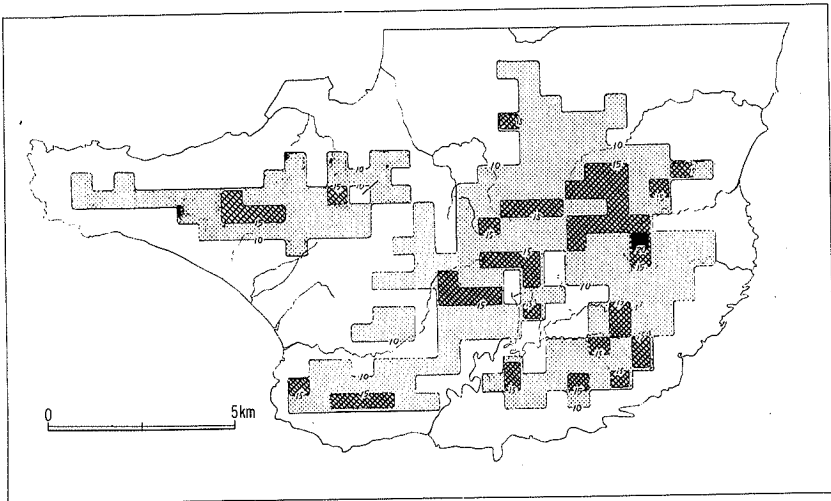
第10表 (千葉県農業試験場 三好洋)

地形による地域区分	地域の細分	特徴土壌とその説明		
丘陵地 西岬丘陵	西部	丘陵上	白浜統 (1 m 以内に基岩・灰色土壌)	
			江田統 (非火山性乾性褐色森林土)	
	東部	丘陵上	高塚統 (褐色森林土)	
			下総統 (強グライ土壌壤土型)	
		谷部	山林	
				水田
	館山南部丘陵	出野尾丘陵	丘陵上	
			谷部	榊統, 三崎統 (砂丘の砂ののっているもの)
		船ヶ作丘陵	丘陵上	高塚統
			谷部	馬立統 (弱グライ土壌強粘質)
		山林	①③④	江田統
				水田
	水田	①	文達統 (厚層黒ボク土壌) 八街統 (黒ボク土壌)	
				水田
	水田	④		
				水田
	水田	④		
				水田
大貫丘陵	丘陵上	江田統, 上砂統		
	低地水田	下総統		
低地	館山低地	東北部	水田	黒部統 (強グライ土壌壤土斑鉄型)
			畑	馬立統 (弱グライ土壌強粘質)
		西部	水田	下総統 (強グライ土壌壤土還元型)
			畑	江田統, 水岡統 (砂岩風化土), 上岩入統 (火山灰混合土壌)
	千倉・白浜低地	丘陵周辺	畑	真倉統 (壤質, 沖積粘土)
			水田	下総統
		海岸部	畑	西岬統 (三紀泥岩風化粘質土と砂丘の砂との混合)
			水田	
		中間地帯	畑	江田統
			水田	横尾統 (三紀泥岩風化による強粘質畑土) 神宮寺浜統 (砂丘)

IV 水系および谷密度図

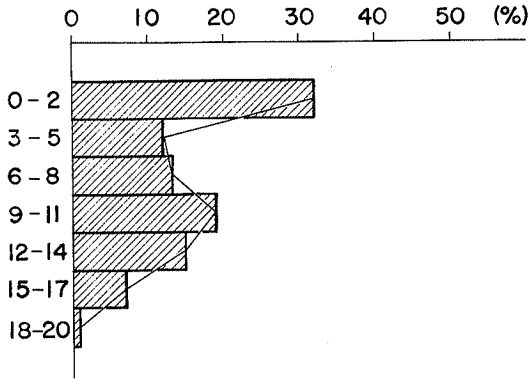
この図の場合、水系と谷密度とは一致するものと考えてよい。図の中の主要河川は、巴川、長尾川、川尻川、瀬戸川、汐入川である。館山南部丘陵船ヶ作付近を分れ界として、汐入川は北側に、巴川と長尾川は西南側に、川尻川は東側に流れる。丘陵地の中だけの流域面積は、長尾川が最も大きい(19.5km²)。これら各河川の主流の方向は、汐入川を除きすべて地層の走向を一致し、支流は走向に対して直角方向に入っているものが多い。西岬丘陵では東西にのびる稜線が分れ界となり、水系は北側の館山湾と南側の平砂浦とに分れている。

これら各河川のうち長尾川が最もよく曲流し、中流部では繞谷丘陵が見られる。長尾川の



第6図 谷密度分布図

〔模様のアミ目は谷密度10以上、格子は15以上、黒は20以上のところ、(数値は作業規程にしたがって算出した)〕



第7図 谷密度の数値分布

主谷は穿入曲流谷をつくり、曲流帯は水田となっている兩岸の「河岸段丘状」の平坦地を深く刻んでいる。

谷密度図の方眼内の数値の配置と傾向から一応谷密度10~15以上の数値の分布する範囲に境界線を入れて谷密度をわかりやすくしたのが第6図である。この図から谷密度10以上のところは丘陵地が大部分を占め、15~20のところは館山南部丘陵Ib2の中にあることがわかる。また、谷密度方眼内の数値の分布をみると第7図のようになる。図の中の0~2が低地の区域、3~5以上が丘陵地の区域に入る。丘陵地の中では9~11の範囲が最も多い。

水系・谷密度と関連のある図

切峰面図からみた水系・谷密度：切峰面図の地形面の谷に相当するところに各河川的主流が流れ、斜面に相当するところに斜面を直角方向に多くの支流がある。谷密度は切峰面の緩斜面に大きく急斜面に小さい。

表層地質からみた水系・谷密度：当地域は泥岩砂岩互層地域、泥岩地域と砂岩地域に大別することができる。泥岩砂岩互層地域には規模の大きい水系があり谷密度が高い傾向がある。主として船ヶ作部丘陵地域に多い。泥岩地域と砂岩地域は規模の小さい水系があり谷密度が低い傾向がある。主として西岬丘陵地域に多い。

起伏量図からみた水系・谷密度：第8図の起伏量等値線図と水系谷密度図を重ねてみると起伏量の値が大きいところでは水系も複雑となり谷密度も大きくなる傾向がある。今少

し詳しくみると、水系図の上に第6図の谷密度分布と第8図起伏量等値線図を重ねてみると次のようなことがわかる。水系は起伏量等値線図の最高値のところで分岐が密となるが谷の最高値からわずかに離れたところで最高値となる。

傾斜分布図からみた水系・谷密度： 第9図の傾斜分布図（作業については後記）と水系・谷密度をみると傾斜の緩いところでも谷密度は大きいところと小さいところがあり、傾斜の急なところでも大きいところと小さいところがある。両者の間にとくに深い関係はみられない。

以上から「館山」図幅の水系・谷密度は、当地域を構成している泥岩砂岩互層、砂岩、泥岩などを基盤とした原地形の上にてできあがった。この地域が丘陵化するまで浸食が進み谷密度が次第に大きくなったが水系を変更させるような大きな変動はなく切峰面がつくる地形面に沿って浸食が進んだものと考えてよさそうである。

（千葉大学・文部教官 川崎逸郎）

V 起 伏 量 図

この図の各パターンの分布をみると、起伏量100 m以上の比較的高いところ(区分値2以上)の大部分が館山南部丘陵地域にあり、西岬丘陵では東側と西側の2か所にある。起伏量50m以下(区分値0)のところは、丘陵周縁の低地および海岸段丘地域にある。中間の起伏量50~100 m(区分値1)のところは、上記2つ地域の間分布している。すなわち丘陵周縁と汐入川、長尾川、瀬戸川、巴川、川尻川などの主要河川に沿ったところと西岬丘陵、出野尾丘陵、大貫丘陵などである。

起伏量の分布を今少しはっきりさせるため、起伏量図の作成作業の過程に少し手を加え(方眼内の最高値と最低値を結んだ中間に値があるものとして)等値線を引き分布やひろがりを見たのが第8図の起伏量等値線である。この図の中では、起伏量の漸移する傾向や分布やひろがりがよく出ているのでオーバーレイ(起伏量図)と重ねて見て頂きたい。

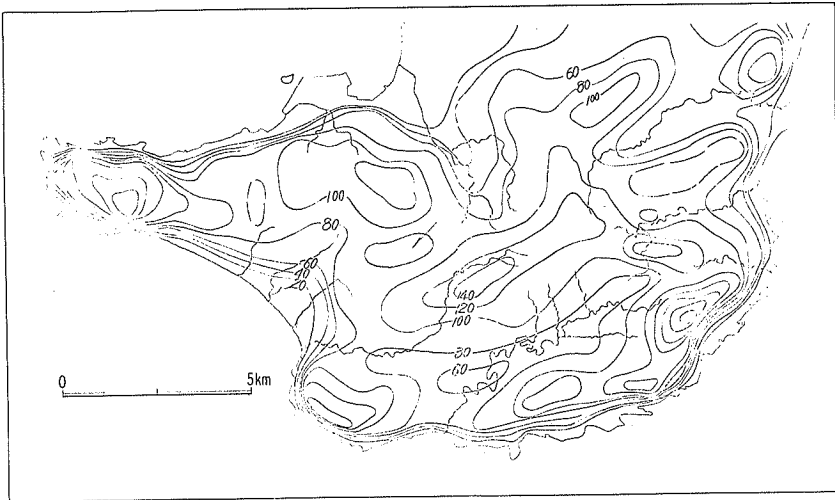
起伏量図と関連のある図

水系・谷密度からみた起伏量： 大要は、水系・谷密度の項に述べた。主要河川主流は、起伏量等値線の値の低いところを流れ、支流は起伏量等値線を直角に切って流れる。

表層地質からみた起伏量： 館山南部丘陵地の大部分を占めている泥岩砂岩互層地域には、起伏量100~150 m(区分値2)以上のところが多い。しかし表層地質が起伏量分布の傾向を制約しているというはっきりしたところはない。

切峰面からみた起伏量： 館山南部丘陵の中で最も起伏量値の大きいところは、高塚山および布良付近、西岬丘陵の洲ノ崎付近である。これら起伏量の大きいところは、切峰面の地形面高度の大きいところである。汐入川、瀬戸川の中流から下流付近、平砂浦低地に向う緩斜面のところは、起伏量の小さいところである。これらの地域は切峰面の地形面高度の小さいところである。以上から当地域の起伏量分布は、岩質の違いよりも切峰面がつくるある時期の地形面にしたがっているといえる。

傾斜分布からみた起伏量： 以上の各図との関連から傾斜値の分布をみると起伏量の大きいところに傾斜値が大きくなるという結果となる。それは第8図の起伏量等値線の上に



第8図 起伏量等値線図

〔作業規程にしたがってつくった方眼（図幅を縦横20等分する）
 〕の中の起伏量値から等値線を引いた

水系・谷密度, 切峰面図をそれぞれ重ねてみると了解されよう。

以上から, 当地域の起伏量の分布は, 岩質の影響よりも切峰面にあらわれた原地形面の影響を受けているといえる。

(千葉大学・文部教官 川崎逸郎)

VI 傾 斜 区 分 図

館山周縁地域は開析が非常に進んでいるため、作業過程の段階で傾斜の表現が難しいところは20mの主曲線間に傾斜を出し、平坦な尾根状のところでは首曲線間が広いところは尾根すじを決め、尾根すじから尾根の片側の斜面について傾斜を出してある。5万分の1では長さ100 mが2mmに表現されているので傾斜の境界、変化するところは2mmの範囲まで追跡してある。水系・谷密度図に表現されているように当地域の開析は非常に進み比高の割りには急斜面のところが多い。丘陵地の大部分が20°以上の地域である。8°以下の緩斜面は主要河川に沿った河岸段丘のところと海岸段丘、低地、丘頂付近、ふところの広い丘陵の谷間などである。40°以上の急斜面のところは少ないが、典型的なものも長尾川の中流～下流部の穿入曲流部と千倉・館山南部丘陵南縁と白浜海岸段丘の接するところにあり海食崖あるいは断層崖によく似た急崖が直線状に続いているところ。その他は西岬丘陵と館山南部丘陵内に散在している。

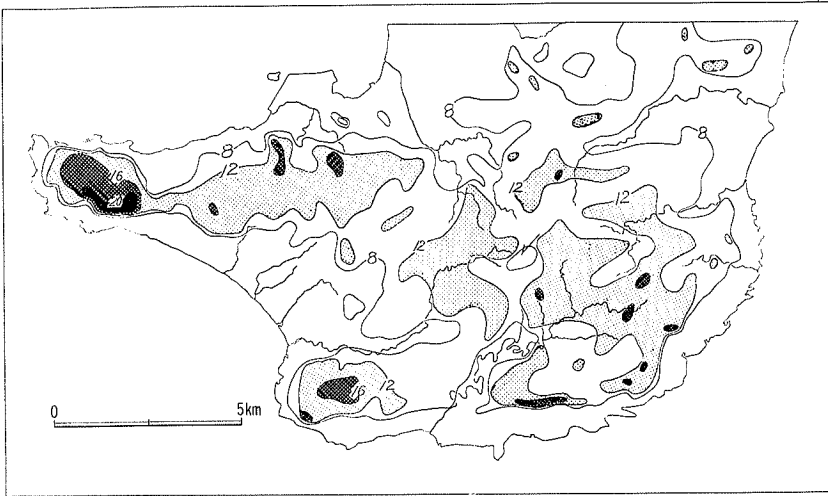
傾斜区分図は、非常に細分されているので全体の傾向を容易に見ることのできるよう第9図の傾斜分布図をつくった。この図は、谷密度の方眼を利用し、各方眼内において代表的な傾斜を求める2地点を選び傾斜値を2地点間のおき方眼内の傾斜を代表するものとし等値線をひいたものである。したがって傾斜30°～40°という局所的な急崖は表現されていない。

傾斜区分と関連のある図

切峰面図からみた傾斜分布： 西岬丘陵西端洲ノ崎付近と館山南部丘陵西南端布良付近にある独立丘陵では切峰面高度の大きいところに傾斜が大きくなる傾向がある。他は館山丘陵、西岬丘陵の100 m以上のところにわずかに傾斜が大きくなる傾向が見られる。

水系・谷密度からみた傾斜分布： 大要は水系・谷密度の項に述べたので省略する。

表層地質からみた傾斜分布： 本地域は泥岩砂岩互層と泥岩、砂岩の分布するところであるが岩質による傾斜の違いを見出すことは難しい。これら岩石が地形の外的営力に対して化学的にも力学的にも同じような反応をもっているものと考えてよからう。



第9図 傾斜分布図

〔模様のアミ目は谷密度 12° 以上、格子は 16° 以上、黒は 20° 以上のところ、（値は作業規則にしたがって算出した）〕

起伏量からみた傾斜分布： 西岬丘陵西端洲ノ崎付近と館山南部丘陵西南端布良付近にある独立丘陵では起伏量が大きくなるにしたがって傾斜が大きくなる傾向がある。その他の地域では起伏量の変化と傾斜の間にははっきりした関係を見出すことは難しい。すなわち本地域では開析が進んでも丘陵斜面の傾斜は大きく変わらないということができる。

以上から本地域の傾斜分布は水系・谷密度、起伏量、切峰面の各図との関連が明瞭でない。このような傾斜の状態は本地域を構成している表層地質が材料力学的にみると地形の外的営力に対してすべて同じ反応をもっているものと考えることができる。

（千葉大学・文部教官 川崎逸郎）

Ⅶ 開 発 規 制 図

開発が急速に進展し、自然環境が著しく失なわれつつある首都圏の中で、南房総地域は、自然環境に恵まれ、かつ遺跡等文化財が数多く残されている。

近年、人口の都市への集中に伴う都市の過密生活から自然への欲求が高まっている。開発が急テンポに進んでいる本県においては、開発との調和において、積極的により多く、より広くの自然を保存することが急務である。

本図幅内における土地利用および開発を制限する人為的要因は、次のとおりである。

1. 国定公園

本地域の海岸風景は、自然的特性でのべたように変化に富んだ景観を有している。これら海岸一帯は、国定公園に指定され、「南房総国定公園」の一部である。大部分の沿岸は、特別地域に指定され、島および一部の磯浜は第1種、沿岸は第2種特別地域として、風致を維持するため保護されている。

これら国定公園内の行為制限は、自然公園法（昭和32年6月1日 法律第161号）に定められ、一定の手続きを経なければならない。

その概要は、次のとおりである。

国定公園内行為制限一覧

知事の許可を必要とするもの	知事への届出を必要とするもの
(特別地域内における行為)	(特別地域内における行為)
<ol style="list-style-type: none"> 1 工作物の新築、改築、増築 2 木材の伐採 3 鉱物の掘採、土石の採取 4 河川、湖沼等の水位、水量に増減を及ぼすこと。 5 広告物類の掲示、設置、工作物等 	<ol style="list-style-type: none"> 1 区域の指定、拡張された際すでに着手していた行為 (30日以内) 2 非常災害の応急措置(14日以内) 3 木材の植栽、家畜の放牧

<p>への表示</p> <ol style="list-style-type: none"> 6 水面の埋め立て，干拓 7 土地の開墾，形状の変更 8 厚生大臣が指定する植物 9 建築物の色彩の変更 	<p>(普通地域における行為)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 厚生省令の基準をこえる工作物の新築，改築，増築 2 特別地域内の河川，湖沼等の水位，水量に増減を及ぼさせること。 3 広告物等の掲出，設置，工作物への表示 4 海面の埋め立て，干拓 5 鉱物の掘採，土石の採取 6 海底の形状変更
---	---

注 ●第1種特別地域——風致維持の必要の最も高いもの（原則として公園計画で決定された施設のみを許容される。）

●第2種特別地域——風致維持の必要度の中位のもの（風致維持が効果的に行なわれるよう規制を図る地域）

2. 保安林

本地域の保安林は，海岸線に多く植林され，ことに本地域は，季節風が強いためほとんどが防風保安林，飛砂防備保安林である。なかでも砂丘をなしている平砂浦にある保安林は，西風あるいは南西風による飛砂を防備し，後背地の農耕地，住宅地の保護に大きな役目を果たしている。また，野島崎の保安林は，風致保安林で，周辺の景観を一層明媚にしている。

山間部は，本部丘陵地帯に水源かん養保安林が2か所，土砂流出，土砂崩壊防止保安林が4か所指定されている。

保安林区域内における法的規制は，森林法（昭和26年6月26日）法律第249号に規定されその概要は，次のとおりである。

- 1 立木，立竹の伐採
- 2 立木の損傷

- 3 家畜の放牧
- 4 下草，落葉，落枝の採取
- 5 土石，樹根の採掘，開墾
- 6 その他土地の形質を変更する行為

3. 鳥獣保護区

館山市南部から白浜西部にかけての一带は、シイの木等の暖温帯広葉樹林が繁茂し、野生鳥類の生息地となっている。このため、この一带を鳥獣保護及び狩猟に関する法律（大正7年4月4日法律第32号）により鳥獣保護区域として設定し、とくに安房神社周辺の大神宮地区は、従来から野生鳥類の生息と繁殖の適地として特別保護区として指定している。

したがって、区域内の鳥獣類の捕獲は、上記法律によって禁止されている。

県では、特別保護全区域を昭和42年からバードセンターとして鳥類の保護、繁殖に必要な施設を整備し、鳥類の保護増殖はもとより青少年の情操教育の場として役立てている。

4. 文化財

安房地域は、文化の発祥地といわれ、神社、仏閣あるいは遺跡類が多く残されている。館山市南部の大神宮地区の安房神社には、古代、安房の統治開発にあたった阿波の忌部一族の祖先がまつられている。周辺一带は、数多くの遺跡があり、また、神宮洞窟は、西部館山湾に面した船越鉦切神宮内の鉦切洞穴とともに県指定史跡になっている。

一方、天然記念物は、白浜町東部の白浜鐘乳洞、西部の屏風岩および館山市沼のサンゴ層の3点が県指定になっている。

白浜の鐘乳洞は、石灰の多い泥灰岩から変じて形成した鐘乳石からなる鐘乳洞で、一般的な石灰岩からなるものと全く異なるもので、洞穴は風化浸蝕による現象もみられる。また、この左手には、県内数少ない瀑布があり、周囲一带が名勝的色彩をおびているので、これらを含めて保護する必要がある。

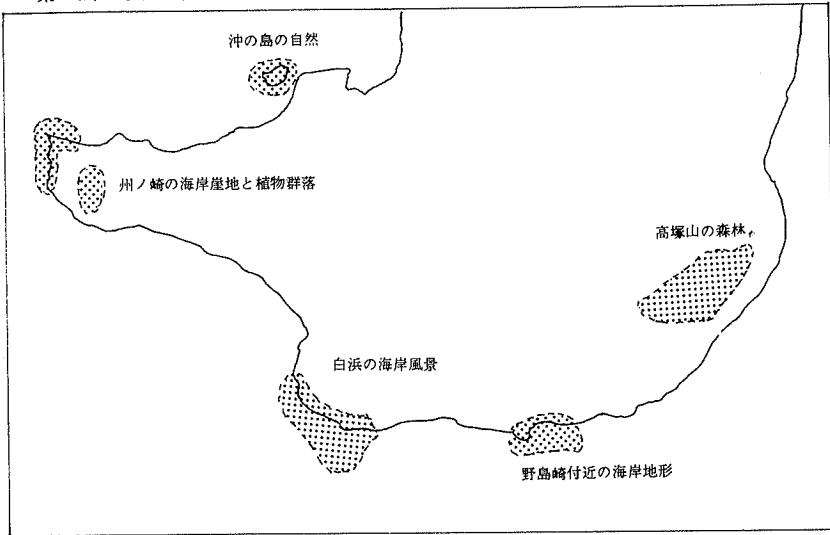
白浜の屏風岩は、国定公園内にあり第2種特別地域に指定された風致景観のすぐれたところである。また、そこには海岸及び砂地植物群落の代表的なものが自生し、名勝的意義もある貴重な文化財である。

また、館山市沼を中心に標高10～20m地点には約1kmにわたりサンゴ層がある。その代表的なものが沼のサンゴ層である。このサンゴ層は、おもに砂、砂質粘土及び粘土からな

る多数の軟体動物化石、有孔虫類やサンゴ類を産し、学術上貴重な文化財である。

このほか高塚山の森林など学術上貴重なものが第10図に示すとおり4か所あり、開発に伴い自然が失なわれつつある今日、多くの自然形態を保存することが必要である。図示したところも地形、地質あるいは植物等の自然資源が豊富で、地学上、植物学上貴重な地域である。

第10図 学術上貴重な自然群の位置図



文化財については、文化財保護法（昭和25年5月30日法律第214号）、千葉県文化財保護条例（昭和30年3月29日条例第8号）により、保護及び活用のための必要な措置を講じており、これらのうち法的規制の概要は、次のとおりである。

- 1 許可を必要とするもの
 - 史跡名勝天然記念物に関する現状変更等の行為
 - 国指定：文化庁長官（法第80条）
 - 県指定：県教育委員会（県条例第35条）
- 2 届出を必要とするもの（文化庁長官）
 - 埋蔵文化財の発掘（法第57条、57条2項）
 - 遺跡の発見（法第84条）

3 環境保全地域における行為の制限, 禁止

(法第81条, 県条例第35条)

5. 海岸保全区域

本地域の海岸保全区域は, 館山湾の港湾区域内 2,570 m, 港湾区域外北側2,000m 南側および千倉町瀬戸海岸2,300 m, 三原海岸2,700 m の5か所指定し, 季節風の強い当地域における高潮等の海からの災害を防ぐための保安施設を設け保護している。

これら指定区域内においては, 海岸法(昭和31年5月21日法律第10号)により, 海岸管理者である知事の許可なくして次に掲げる行為は禁止されている。

海岸保全区域における占用および行為の制限(法7・8条)

- 1 海岸保全施設以外の施設, 工作物の設置
- 2 土石(砂を含む。)採取
- 3 水面若しくは他の土地に他の施設等の新設, 改築
- 4 土地の掘さく, 盛土, 切土
- 5 その他政令で定める行為

6. 特殊専用地区

本地域における特殊専用地区は, 館山市市街地西部に位置する海上自衛隊航空基地のみである。

(千葉県企画部企画課 竹内正夫)

<参考文献>

千葉県文化財総覧(千葉県教育庁文化課)

千葉県自然公園(千葉県土木部計画課)

<資料提供機関>

農林部林務課, 土木部計画課, 河港課, 教育庁文化課

VIII 土地利用現況図

本地域は、約40%が林地により占められており、館山市の市街地周辺および平砂浦周辺を除き、一般的に丘陵林地が海岸線近くまでせまっており、平たん部分が少ないため、生産性の低い土地利用を強いられた地域となっている。

本地域を構成している主要市町である館山市、白浜町、千倉町の民有地面積は、第11表とおり、9,135 haである。その主なものは、農地が4,109 haと全体の45%を占め、つ

第11表 地目別民有地面積

市町村名	総数	田	畑	宅地	山林	原野	雑種地
館山市	6,423	996	565	2,608	283	283	90
白浜町	919	259	79	387	—	—	—
千倉町	1,793	399	154	843	14	14	4
計	9,135	1,654	798	3,838	297	297	94
比率	100.0	18.1	8.7	42.0	3.3	3.3	1.0

ぎに山林の3,838 haの42%となっており、宅地は798 haで8.7%となっている。そしてこれらは、それぞれ次のような特色により土地利用が行なわれている。

1. 農地

本地域の農地は、一般的に丘陵部が海岸線近くまで迫っているため、概して海岸線にそった平たん地に帯状にひらけている。

ことに、水田については、山側に向かい小河川ぞいに、いわゆる谷津田として発達している。このようなことから、本地域における農地は、田または畑として、大規模な土地基盤のうえには成り立たず、その経営は小規模基盤による田畑の複合経営を主体として行なわれている。

しかし、農地として、やや団地的形成をしているのは、館山市汐入川および平群川流域

の水田地帯、千倉町瀬戸川周辺の水田、畑作地帯である。これら農地は、水田による水稻栽培のほか畑地については、特産としての菜、花卉栽培等に利用されている。

また、白浜地域の水田については、水稻の裏作として花卉栽培も行なわれている。

このように、本地域の農地は、複合経営にささえられ、土地の生産性は他地域に比し高くなっているが、水田については、一部を除き湿田であるので、土地改良による基盤整備等を行なうほか、観光開発に併行してのアグリシステム等の導入の検討が必要であろう。

樹園地としては、館山市稲、山本地域のみかんが主なものである。

2. 草地

人口草地は、館山市船ヶ作の68haで、放牧地および採草地として利用されている。

3. 林地

本地域の林野面積は、全面積の約40%を占めている。その分布は、千倉町高塚山206mを中心とする千倉町の後背地林地、白浜町後背地林地、それに、館山市州崎から東に伸び白浜後背地に至るまでの館山市の林地となっており、標高200m以下の丘陵地である。

本地域の天然林は、質の良くない広葉樹が主であり、次の理由により人工造林は進んでいない。

- (1) この地域の林地のほとんどは、急傾斜の「キザシ」の多い山林で植林に不適當な場所が多く、かつ、林道網が不備であること。
- (2) 一人当たり所有面積が零細であるほか、共有林が比較的多い。
- (3) 所有者の多くは、農業を含むその他の収入のウエイトが高いため、山に対する関心が低い。

しかしながら、昭和12～13年頃からの県有林の造成あるいは、海岸砂防林の造成、さらには、戦後における森林所有者の造林意識の向上等により造林適地には薪炭林を目的とした松の人工造林が進んだ。

なお、ごく一部であるが、広葉人工林として千倉町大井倉地区にマテバシイ林がある。現在は薪炭林需要の減少、労働力不足、林業の低生産性等により、林地に対する関心は低くなっている。

本地域の森林は、近時の観光ブームにより、海洋資源とともに貴重な観光資源となりつ

つあり、今後は自然環境の保全にそった森林資源の有効な活用を図る必要があろう。

なお、保安林は、館山市平砂浦地区の砂防林、ならびに千倉町後背地林地の水源かん養林等が主である。

4. 都市，村落

本地域構成市町の宅地は、館山市の565 ha 白浜町の79 ha，千倉町の154 ha で民有地面積の8.7 %を占めている。

これらのうち、人口集中地区として、市街地形態をなしているところは、館山市の中心市街地の3.4 ha，千倉町中心部の0.9 ha であり、その他はいわゆる村落形態として海岸線ならびに国・県道，鉄道の沿線ぞいに散在している。

5. その他

以上のほか、主なる土地利用としては、施設緑地として館山市に2ヶ所のゴルフ場，館山市平砂浦の県営植物園および自衛隊の館山基地等が主なるものである。

(千葉県企画部企画課 伊藤 和 二)

1971年3月 印刷発行

房総半島総合開発地域
土地分類基本調査

館 山

編集発行 千葉県企画部企画課
千葉市市場町2番地

印刷 株式会社 さくら印刷
千葉市長洲町2の22番地